各町の凧印、屋台、法被がひと目でわかる!

参加全172か町一覧

「凧印」とは凧に描かれた文字や図柄などの印のこと。各町ごとに印があり、そのいわれは町名に由来するものや町内の団結を強めるものが中心となっています。また、重層、唐破風(からはふ)、入母屋造りと、豪華でまばゆいばかりの「御殿屋台」。彫刻の題材も子どもの健やかな成長を願うものや縁起ものなど様々で、各町の思いが伝わってくるようです。
「法被」のデザインは凧印と同じか、アレンジしたものが主流ですが、中には全く別のものなど、町によって多様な個性が見られます。

※ a 屋台の種類　b 彫刻の種類　下段は凧印の説明文

相生町(あいおいちょう)

a 重層唐破風
b 昇り竜、下り竜の一刀彫

相生の地名は、夫婦が深い契りと愛情によって共に長生きすることを意味している。町名にちなんで「相」を赤色、「生」を青色で図案化した。

葵西(あおいにし)

a 唐破風軒搦入母屋造り
b 雷神、風神

昭和61年に初参加。それ以前にも、この周辺地域では大凧揚げの習慣があり、その凧印に用いられていたのが「葵」の文字だったことから、同様の「葵」の力強い文字の凧となった。

市野町(いちのちょう)

町名の由来は、昔ここに市が開かれていたためとする説が有力である。凧印は「市」の牡丹文字を基本に図案化し、丸文字は市野町三自治会の親睦の和を表したものである。

池町(いけまち)

a 重層唐破風入母屋造り
b 水鳥、七福神、金太郎

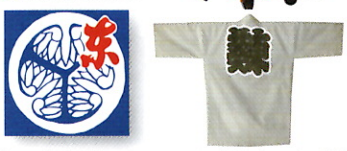
大正末期まで、昔の池町消防団のまといの印、豆腐と団子であったが、現在は芳蘚寺の催しに使う五色の幕を凧印として使用している。

有玉西南北町(ありたまにしみなみきたまち)

有玉連の凧印「有」は有玉神社と関わりがあり、由緒ある有玉神社の「有」の字を頂き、有玉連の凧印とした。

葵東(あおいひがし)

a 桃山式二層唐破風出組み造り
b 日本昔話しの彫刻



当町に葵東照宮があることから、徳川家の三ツ葉葵の家紋を使うことになった。「東」を略字にして三ツ葉葵の右上隅へデザインした。

入野地区(いりのちく)

時の引間城主飯尾豊前守の長男、義廣公の誕生を祝い、入野村住人の佐橋甚五郎の発案でその御名を大凧に配し、城中高く揚げたことに由来。

泉(いずみ)

a 唐破風軒搦入母屋造り
b 牛若丸と義経(前)、竹取物語(後ろ)

泉の周辺が銭取であったことから、昔の銭印である一文銭を凧印にし、町名の「泉」の文字を配した図柄としている。

安間町(あんまちょう)

安間町の由来は、鎌倉時代から安間という御名で古文書にみえており、伊勢神宮の神領であった。凧印は、安間町の頭文字を取ったものである。

浅田町(あさだちょう)

a 重層唐破風入母屋造り
b 大黒柱に力神を彫刻、白木彫

大正初期までは花札の「あやめ」の絵凧であった。現在は浅田の「あ」を中心に「田」を右上と左下に分けてデザインしたものである。

植松町(うえまつちょう)

a 一層大唐破風総桧造り本舞台
b 絵は源氏物語と屋台守護の竜、虎、唐獅子

町名に表されているように、町内には今も松が植えてある家が多く、町のシンボルでもあった。平成2年に復活参加する時も、この「三蓋松(さんがいまつ)」を凧印に採用した。

板屋町(いたやまち)

a 大唐破風重層造り
b 金太郎、七福神(十二支)巻竜、浜と松

「わつなぎ」印と呼び、輪は「人の和に通じて町民仲良くするもの」であり、つながった輪の両端が切ってあるのは限りなく続く意を示す。

飯田町(いいだちょう)

町内から案を募集した飯田町の凧印は、頭文字の「い」を全体に大きくし、「田」の字をバックデザインとして使っている。

小豆餅(あずきもち)

a 唐破風軒搦入母屋造り
b まわりは干支、正面は昇り竜、下り竜

三方原合戦の地に今も残る小豆餅、銭取の地名から、餅つきの杵を中心にして左右へ一文銭を配し、小豆餅の「小」の字をデザインした。

凧揚げ会場では、凧が落下する場合があります。上空にはご注意ください。

上西町（かみにしちょう）

ⓐ 一層の総ケヤキ造り
ⓑ 七福神、桃太郎物語

上西町の氏神である富士神社の御神紋を示し、天狗の追い風に乗り、青空へ舞い揚がるようにとの願いが込められている。

金折町（かなおりちょう）

天竜川の下流が幾筋にも分かれ、狭まっていた村里であったという説と、宇津志田金折命が住んでいた土地から町名を命名したという説とがあり、その頭文字の「金」を取り入れたものである。

大蒲町（おおかばちょう）

大蒲を中心とする一帯は平安時代には蒲が生い茂った湿地帯であった。凧印には、凧いっぱいに「蒲」の一字を大きく力強く描いている。

瓜内町（うりうちちょう）

戦前より、片仮名の「ウ」を凧印にまつりに参加していたが、「瓜」の感じを出すために凧印は、「ウ」から平仮名の「う」に変わった。

亀山（かめやま）

ⓐ 重層式入母屋造り
ⓑ 鶴と亀、乙姫、浦島太郎、亀

町名にちなんで、縁起の良い「亀」の字と、その背面の弓矢を「ヤ」と読ませ、矢の先端に「マ」を配して亀山町とした。

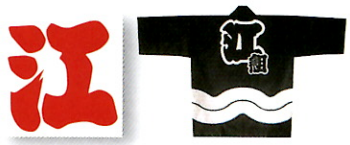
上新屋町（かみあらやちょう）

その昔、縁台将棋の盛んな時代があった。当時は多くの棋士を輩出し、周辺地域での対戦では負けを知らなかったと言い伝えられており、将棋の駒がデザインとして用いられた。

卸本町（おろしほんまち）

参加当初は「HOC」（浜松卸商センター）のマークを使用していたが、昭和53年から卸商団地の「卸」の一文字に変更された。

江之島町（えのしまちょう）



白地はまつりに初めて参加した時の初心を忘れることのないように、赤の「江」は町民のまつりに対する熱い想いと強い結束、更なる発展を表す。

鴨江町（かもえちょう）

ⓐ 重層式入母屋造り

「可」の字を変体かなで書くと「の」となる。これが鴨江町の凧印の原形になっていると思われる。

上石田町（かみいしだちょう）

古くから水田が広がり今もその面影を残している。稲穂がたわわに実り波打つ田の様に力強い石（意志）を中心に上（天）に高く昇る町民の心意気を図案化。

尾張町（おわりちょう）

ⓐ 重層唐破風入母屋造り
ⓑ 金太郎、一寸法師、羽衣、浦島太郎

大正14年に慣れ親しんだ下垂町から尾張町に町名変更し、尾張の「尾」を太文字で、片仮名の「ヲ」を亀甲に8字を填め、凧印とした。

海老塚町（えびつかちょう）

ⓐ 重層唐破風
ⓑ 上段が童話で下段が花丸

大正15年5月発行の浜松名物凧案内という小冊子に記載されている印には「エ」の背景に右肩から左下にかけて2本のラインが描かれていたが、現在は上記の図柄となっている。

鴨江北町（かもえきたまち）

ⓐ 桃山式二層唐破風
ⓑ 七福神の彫刻、鯉仙人、牡丹、獅子

昭和60年に「の組」から分離して独立参加したのを機に、町民から寄せられた図案を基に決定。町名の「鴨」と「北」をバランスよく組み合わせたデザインとなっている。

上島町（かみじまちょう）

初子が五月の空に天まで揚がる凧のように、たくましく成長してほしいという願いを込め、上島町の一字「上」を取って定めた。

恩地町（おんぢちょう）

大田家は私費を持って安間家の租税を代納した。これを聞いた今川氏は恩を受けた土地「恩地町」と命名。凧印はこの町の沿革と地名の一字を示している。

遠州浜町（えんしゅうはまちょう）

町民と地元中学生に図案の公募を行い、他町の凧印と識別しやすく、青空に映え、住民が親しみを持てる等の選考基準で選定した。

北田町（きたたまち）

葺きおろし「しころ」に大鍬形、鉄面を配し図案化した。端午の節句、尚武にちなんで、勇壮な凧印として兜を凧印としている。

神田町（かみだまち）

以前は浜名郡可美村明神野と呼ばれた。「神様が創造し守護している有り難い土地」という伝承から、「神」を大きく凧いっぱいに描いた。

鍛冶町（かじまち）

ⓐ 唐破風軒搦入母屋造り
ⓑ 能、東海道五十三次、町童がモチーフ

浜松城内の鍛冶屋敷に住んでいた鍛冶師達を集団で東海道筋の町裏に移した所が鍛冶町となった。「か」は町名の頭文字。

追分町（おいわけちょう）

ⓐ 唐破風軒搦入母屋造り
ⓑ 七福神と十二支

追分の凧印は「旭日旗」から「兜」、「を」、「追」と変化してきた。凧が揚がったとき見分けにくいという理由から、現在の印になった。

凧揚げ会場内芝生エリアは、浜松まつり参加者（正規の法被着用者）しか入ることはできません。

佐藤中町（さとうなかまち）

ⓐ 大唐破風白木造り一層式
ⓑ 天の岩屋戸、八俣大蛇、天孫降臨など

当町の凧印は変体仮名の「さ」のななめ上下に藤の花が入っていた。町名が分かれてからは、町の頭文字を変体仮名にしている。

幸（さいわい）

ⓐ 大唐破風白木造り一層式

町名の由来は、町内の中に幸西山という山があったことや、幸を願う住民の気持ちを込めて、幸町とされた。凧印は、町民が幸せとなり、また幸せな町づくりを願い表した。

神立町（こうだちちょう）

浜松地方最古の社、蒲神明宮の神紋と町名の「神立」の文字をデザイン化したもので、浜松まつり参加以前から蒲地区の祭礼に用いており、町民になじみ深いものである。

北寺島町（きたてらじまちょう）

ⓐ 唐破風軒搦入母屋造り
ⓑ 昇り竜彫り上げ

寺島の北側にあるので、町名を「北寺島町」とし、凧、提灯、手拭い等に「北」の字を使用するようになった。

佐鳴台（さなるだい）

佐鳴台地区には、浜松城主徳川家康の正室、築山御前にまつわる大刀洗の池および赤宮神が存在していたなど、双方女性にまつわる史跡から、女性の喜怒哀楽を表現するという般若の面を使用している。

栄町（さかえまち）

ⓐ 掛塚式
ⓑ 戦国絵巻

栄町は、鴨江小路の一部と大堀新地、白山下に位置し明治15年から祭りに参加している。栄組の凧印「サ」の字は凧が鮮明に見えるように、紺地に白抜きとした。

紺屋町（こうやまち）

浜松城主から消火活動に活躍した褒美として鳥兜を賜ったことにちなみ、かつては鳥兜の絵を凧印としていたが、凧が高く揚がると識別しづらくなり合戦の際に不利であることから、現在のカタカナのコ印に変更した。

木戸町（きどちょう）

ⓐ 唐破風軒搦二重屋根入母屋造り
ⓑ 竜、鳳凰、十二支

浜松城下、外木戸、内木戸があった時に「木戸町」の町名がつけられた。凧印は、この木戸町の頭文字の「き」である。

佐鳴台一丁目（さなるだいいっちょうめ）

ⓐ 重層入母屋造り
ⓑ 竜と虎と七福神

この地域が古戦場であったことから、佐乃一組が凧揚げ会場に挑む心境を、矢立の中にある一本の矢羽根として町のシンボルにみたて、これを凧印とした。

肴町（さかなまち）

ⓐ 一層式唐破風造り
ⓑ 桃太郎、天女羽衣の舞、日鶴、鯛

元魚町にある松尾神社の社紋の日鶴を肴町の凧印としている。松尾神社は、最初浜松城内で守護神として祀られている。

小沢渡町（こざわたりちょう）

赤は太陽、青は空を意味し、正方形の升目は小沢渡町の益々の発展を祈願する意味が込められた凧印である。

倉松町（くらまつちょう）

凧印は町名の頭文字「く」を海辺一帯に群生する松の老樹で囲み、松の緑を取り入れ、文字を赤で表したものである。

参野町（さんじのちょう）

昔、津毛利神社には三つの神社が祀ってあり、三神野町と呼ばれていたのがなまり、参野町と呼ばれるようになった。その頭文字の「参」を印とし、三本線は三つの神の意味を表している。

篠ケ瀬町（ささがせちょう）

町名の由来は、昔、天竜川の瀬にあった頃一面の笹が生い茂っていたところから名付けられたと言われてる。昔の笹ケ瀬町の文字の笹を凧印と決めた。

湖東町（ことうちょう）

凧印の「湖」は、浜名湖の湖と町名でもある湖東町の「湖」を使い、ひげ文字で表したものである。

元目町（げんもくちょう）

ⓐ 重層唐破風入母屋造り
ⓑ 桃太郎物語を基に一連の彫り物

初子が元気に育つようにということで「元」の字を真ん中にした。目の字を斜めにしたのは、子供たちが自分の目で、人生をしっかりみつめ立派な人間になるようにと願いが込められている。

三和町（さんわちょう）

「さ」の字は三和町の頭文字で、斜めの三本線は、浜名郡飯田村といわれた時代の福増、小松方、西之郷の三つの字を表している。

佐藤西南（さとうせいなん）

ⓐ 重層唐破風入母屋造り

町名の「さ」と「藤」を丸くあしらったもので、町民全員が丸く仲良く、そして町が発展するようにとの願いを込めたものだといわれている。

子安町（こやすちょう）

ⓐ 一層大唐破風桧造り

町名は、子安神社にちなみ名付けられたと思われており、その頭文字「子」の字を使用した。

小池町（こいけちょう）

鯉組の凧や法被には、「鯉のぼり」のいわれにあやかり『鯉』の印が描かれている。町民全体で凧揚げやお祝いの練りをして、初子のお祝いと町全体の繁栄・幸福の願いが込められている。

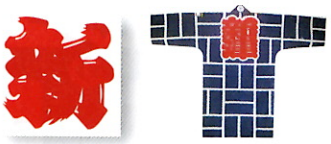
防潮堤斜面は立入禁止です。感染症対策にご協力ください。

住吉（すみよし）

a 唐破風軒搦入母屋造り
b 五社車（風神、雷神、力神、恵比須、大黒）

住み良い町、住吉、これが町名の由来で、昭和15年に旧地区名、大柴原から町民の多数意見によって住吉町となった。戦後復興間もない頃から凧に参加をし、町名の頭文字である「ス」を凧印としたものである。

新津町（しんづちょう）



刀工志津三郎兼吉がこの地に土着したことから志津がなまって新津の地名が付けられたといわれる。凧印は町名の「新」の字を使用。

下飯田町（しもいいだちょう）

下飯田町は天竜川に隣接した地域にあるため、水を治めるものという発想から、龍の絵柄を凧印としている。

塩町（しおまち）

a 二層式唐破風軒搦入母屋造り
b 仙人と張良、加藤清正の虎退治、竜唐獅子

塩商人たちがこの町に住んでいたため塩町と呼ばれていたが、凧印は志保町とあて字としている。不祝儀の時は士の下に心を書くので、縁起をかつぎ、心を点の結びつきとして使用する。

西伝寺町（せいでんじちょう）

町名の由来は、浄土宗の古刹西伝寺の寺号がそのまま地名になった。凧印は、西伝寺の「せ」を平仮名で表したものである。

助信町（すけのぶちょう）

a 重層一本の桧で作った白木造り
b 巻き竜

助信町は昭和11年にまつりに初参加して以来、町名をとって「助」の字を凧印としている。

下池川町（しもいけがわちょう）

a 重層入母屋造り
b 上桃破風軒唐破風出組、下軒唐破風式手光組

大正末期から昭和44年頃まで「イK川」と、大正時代には珍しい図柄であったが、揚がった時「K」が細く見にくいため、池川の「イ」とした。

蜆塚町（しじみづかちょう）

a 重層入母屋造り
b 七福神と仙人

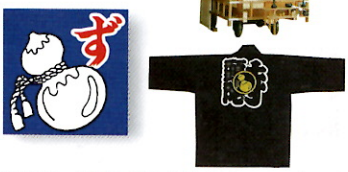
蜆塚遺跡をもって代表される町。浜松市民のルーツがこの里において生活していたとされる。凧印は、町名の「蜆」を取り入れたもの。

早出町（そうでちょう）

a 重層唐破風入母屋造り
b 古事記、日本書紀の中から神話や伝説よりとった

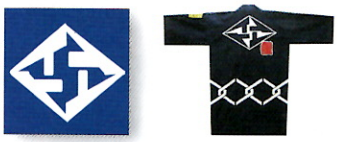
俗説ではあるが、早出の地名の由来は、村人が勤勉で、朝早くから田畑に出て農作業にあたったためといわれている。凧印は、町内より募集し、町名にふさわしい「早」となった。

頭陀寺町（ずだじちょう）



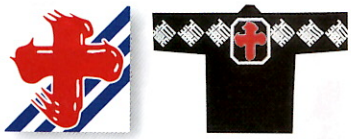
頭陀寺城の松下加兵衛之綱に仕え、のちの太閤秀吉となる出世話にあやかって、ひょうたん印で初子の将来の幸運と出世を祈り、町民同士の語らいの和の意を込めている。

下石田町（しもいしだちょう）



下石田町の凧印は、明治時代の駆けつけ組（消防隊）の印と、その当時興行をした一座の紋を取り入れたイ菱を使っている。

十軒町（じっけんちょう）



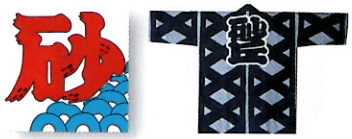
馬込川を挟んで東西両岸に町並みがある。三本線は馬込川を表し、町内の発展を情熱の赤の「十」の字で表現している。

田町（たまち）

a 重層唐破風銅板葺屋根
b 鶴亀仙人、竜、寅、昇り竜、下り竜（十二支の動物）

遠江分器稲荷神社は、田町の氏神様として町内に鎮座している。この神印である光林寺（棒持ちの玉）の紋を図案化したものを使用している。

砂丘町（すなおかちょう）



日本三大砂丘の中田島砂丘から「砂」の文字をひげ文字として、遠州灘の雄大なる波を表した凧印。子供の成長が「天まで上がれ」の願いに込められている。

白羽町（しろわちょう）

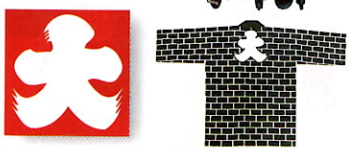
白羽の矢を村人たちは宝物として保存した。以来、この地は白羽と呼ばれ、「白」の字を「羽」で抱きかかえてた凧印が使われている。

篠原地区（しのはらちく）

外枠は太平洋の紺碧の色。内側の丸は参加組員の心意気を示している。篠原地区の篠を「し」とし、初子のお祝の象徴、鳳凰を表現し、「の」は、勾玉をデザインした。

大工町（だいくまち）

a 二層唐破風総白木造り
b お伽噺を題材にした彫刻



大工町の凧印は、昭和30年代半ばより、町名から取った字凧である。それ以前は一つ巴の絵凧だった。

砂山町（すなやまちょう）

a 唐破風軒搦入母屋造り
b がま仙人、二匹の竜（夫と妻）

参加当初は「す」であった凧印も、明治中頃から新豊院のお稲荷さんの狐にあやかり、狐を愛嬌のある図柄にした。

新町（しんまち）

a 三層桃山大唐破風造り
b 日本昔ばなし、花咲か爺、舌切り雀、かぐや姫

米の仲買人が多かったため「※」（江戸時代の米屋の商標）の図案を用いていた。その後「七転び八起き」の諺にあやかって「だるま」に変更した。

四本松町（しほんまつちょう）

熊野神社の境内に四本松の由緒が刻まれた石碑が建っている。その松が四本松と呼ばれ、町名となった。凧印は「四」をとって印とした。

凧揚げ会場では、凧が落下する場合があります。上空にはご注意ください。

富塚町北（とみつかちょうきた）

武田勢が攻めてきた折、家康は驚き慌てて鯉の片方を食べ、片方の身はそばの池の中に捨てた。片身の鯉は出世して、佐鳴湖の主になったという云われを図案化した。

伝馬町（てんまちょう）

a 重層総ケヤキ造り
b 日本昔ばなし、呉道子の竜、唐獅子牡丹

参加当初から町名の頭文字の「て」を使用。その後、大空に白抜きの「て」が鮮明だからということで、青地に白文字に統一された。

都盛町（つもりちょう）

都盛町の凧絵は、最もシンプルな平仮名の「つ」がシンボルマークである。地色は清潔感のある白色。「つ」の文字は、町民の団結とまつりにかける情熱を象徴する赤色で表示した。

高町（たかまち）

a 唐破風軒搦入母屋造り

高町の豆菓子を専門に製造販売する評判堂という店の商標「おかめ印」。豆屋のおかめなら絵柄も派手で目立つであろうと登場した次第である。

富塚町西（とみつかちょうにし）

a 重層唐破風入母屋造り
b 昇り竜、下り竜、風神雷神

町内を流れる新川にかかる弥生橋が組名の由来。「生」の字を蝶のように図案化して大紋に使用。平成30年から富吉町のご厚意で中央屋台引き回しに参加。

天龍川町（てんりゅうがわちょう）

町内よりデザインを募集し、これからの子どもたちのためにも、天竜川を凧印とするのが分かりやすいのではないかということで、決定された凧印が「天龍」である。

寺島町（てらじまちょう）

a 大唐破風二層造り
b 風神、雷神、昇り竜と下り竜、獅子に牡丹

昭和22年に寺島町有志で「テ組」として参加、現在に至る。赤地に白抜きの文字であったが、現在は白地に赤文字の2種類となっている。

高丘（たかおか）

a 重層入母屋軒唐破風造り
b 松、鷹、龍、風神、雷神

誰にでも高丘の凧だと識別できて、なおかつ既に参加の先輩町と同じ図柄（高・た・タ・絵）とならないように苦労したデザインである。

中沢町（なかざわちょう）

a 重層唐破風入母屋造り
b 雷神、風神、天人の羽衣、かぐや姫、唐獅子と牡丹

凧絵は当時の血気盛んな火消し連の纏頭（まといかしら）を画したもの。他を圧倒する程の力強さの象徴である。

利町（とぎまち）

現在の印はタテ中心にまっすぐに描いてあるが、大正末期の写真では斜めに形どった凧絵が使われていた。輪違いのような印は、「と」の字の図案化された形で利町の消防組の纏の頭部のものである。

寺脇町（てらわきちょう）

「寺」という字を大きく描き出し、稲穂がその字を浮き出している。町名を浮き立たせ、稲穂で豊作を願い、子どもの健康と町の幸せを祈願している。

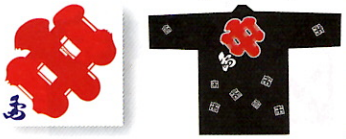
高林町（たかばやしちょう）

a 重層唐破風
b 童教育のための24人の孝子の話。親孝行を肝に銘じる

地名はおそらく三方原丘陵の小高い台地の上に広がる小松林にちなんで付けられたものであろう。凧印は町名の「た」を図案化したもの。

中島町市場（なかじまちょういちば）

b 龍、虎、廻り鯉



昭和23年以降毎年参加している。最初の斜めの「市」の字は浜松市の凧と間違えられる事もあり昭和38年に斜めに「中島」と書き、凧印になった。

常盤町（ときわちょう）

a 重層入母屋造り
b 唐破風、千鳥破風、桃太郎一代記8面、鳥の彫刻（腰廻り）

常盤町ト組の町民が、和をもって結びついている事を表すために、「ト」に輪と、結びつく絆の力強さを描いたものである。

天神町（てんじんまち）

a 重層唐破風
b 雷神、風神、玉を抱える竜。十二支、加藤清正虎退治

通称「ヨコテン」は、明治からの長い歴史を持つ。「ヨコテン」の凧は軽いし、よく揚がる…と、さすがに伝統の凧であると言われる。

立野町（たてのちょう）

立野町は天竜川の渡船場として栄えた歴史上由緒ある町である。成長と力強さを表す、立野町の頭文字「立」を力強く描いたものである。

中島町諏訪（なかじまちょうすわ）

a 重層唐破風
b 霜柱、神話を題材にした彫物

諏訪町の「す」を中心に置き、「わ」を8つの輪に表し、連帯と調和を兼ねて凧の印としたのが、中島町諏訪の凧印である。

富塚町（とみつかちょう）

明治に消防組「富組」が発会、昭和8年に金馬簾5條が許され県下一の消防組となった。富塚町凧揚会はこの栄誉に因んで「富組」と呼び、凧印の「富」の字は富塚町の富を意味している。

天王町（てんのうちょう）

町の花火大会の熱気をイメージするとともに、この心意気を歌舞伎で英雄や神仏の化身を表す隈取りに結びつけ「天王」の文字を表現した。

千歳町（ちとせちょう）

a 桃山式三手崎出組造り

この地方きっての古社松尾神社が氏神。御身体を守護する猿田彦命（天狗様）をもって他町の凧を威圧せんと若衆の意気衝天の心をよく表している。

凧揚げ会場内芝生エリアは、浜松まつり参加者（正規の法被着用者）しか入ることはできません。

西菅原町（にしすがわらちょう）

ⓐ 重層唐破風入母屋造り
ⓑ「心」という文字に波しぶき、昇り竜、下り竜、竜雲

西菅原町は菅原道真の「菅」を凧印として、凧揚げに参加している。

西町（にしまち）

西町の「に」を表している。「に」という字は簡単で形がよく、凧に合う。空高く揚がった時、はっきり見えることから、「に」を凧印とした。

茄子町（なすびちょう）

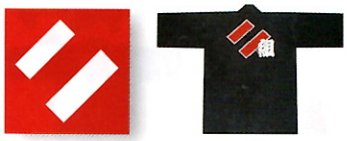
凧印は茄子町の「茄」の一文字を取り、凧も法被も茄子紺の色に統一している。

中島町本町（なかじまちょうほんまち）

ⓐ 唐破風軒搦二重屋根入母屋造り
ⓑ 一寸法師、十二支

外側に中島町の「中」を、内側を本町の「ほ」のデザインに決定し、それがほん組の凧印になっている。

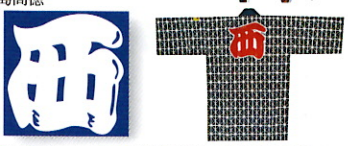
西山町（にしやまちょう）



頭文字「ニ」の文字が一番シンプルで、凧が大空に高く舞い揚がった時、はっきり見えるという理由で決定した。

西伊場町（にしいばちょう）

ⓐ 重層唐破風
ⓑ 後醍醐天皇と南朝の忠臣楠木正行、新田義貞、児島高徳



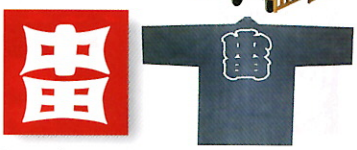
誰にでも分かる文字で、町名を端的に表す「西」の一文字を凧印に決めた。

名塚町（なづかちょう）

名切、塚越の二つの字が合併し名塚町となった。二つの字の神社を合祀して奈津賀神社とした。神社の頭文字「奈」を凧印としている。

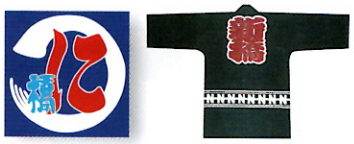
中田町（なかだちょう）

ⓐ 重層唐破風造
ⓑ 飛竜、龍虎、鯉の滝昇り



中と田の字がそれぞれ四方に、合わせて八方位に力強く広がり、町民の親睦、町内の活性化、青少年の健全育成、住みよい町づくりに寄与することへの願いが込められている。

新橋町（にっぱしちょう）



その昔、この地の北は沼地が広がっていて、東海道筋に出る道の妨げになっていたため、新しく橋を架けた事が町名の由来と言われている。

西ケ崎町（にしがさきちょう）

西ケ崎は旧浜松市の最北に位置し、浜松を災害から守り、市民の幸福と豊作を祈願して、毘沙門天を絵柄にしている。

平田町（なめだちょう）

ⓐ 一層唐破風

琉球の使者が琉球王妃の緋扇を江戸将軍家に献上する際、当地で病死し、その遺品であった緋扇を凧印として使っている。

中田島町（なかたじまちょう）

子供でもおぼえやすい平仮名で、52軒当時の仲間意識を表し、未来に向かって大きく羽ばたくよう、凧いっぱいの文字とした。

布橋北（ぬのはしきた）

飛可羅寿（ひからす）の絵凧は名残町の凧として昔から揚げられてきた伝統の凧。これは神の使いのからすなのだという話が絵柄となっている。

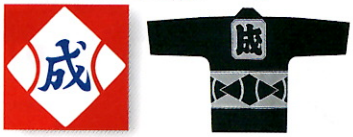
西上池川（にしかみいけがわ）

ⓐ 重層唐破風入母屋造り
ⓑ まき竜のオスとメス、町内安全、夫婦の和合

桜の木が多い町であることから、神明宮の境内の桜の花びらを図案化した。花の真ん中に池川町の池を抱えた絵凧にした。

成子町（なるこちょう）

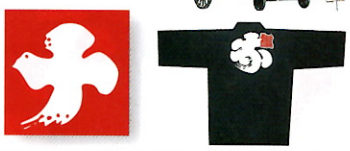
ⓐ 桃山風二層式千鳥唐破風造
ⓑ 昇り竜、下り竜、唐獅子に牡丹、櫻に御所車、松に鷹、風神、雷神、義経、弁慶、麒麟、四神獣



菱形に「成」の字。「小」の字を紋章化した家紋「小の字菱」と思われる。

中山町（なかやまちょう）

ⓐ 重層唐破風造り



種々の事情により町内が二つに分かれ、別々の凧印で2枚の凧を揚げていたが、統一して分かりやすい中山町の頭文字「ナ」とした。

布橋南（ぬのはしみなみ）

ⓐ 一層唐破風

空に揚がってしまえば簡単ですっきりした方が良いということで、白地に赤の「布」印に決まった。

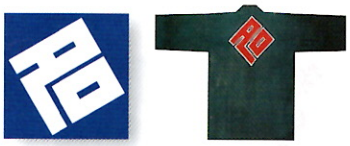
西島町（にしじまちょう）

赤と青地に町名を白抜きした。赤は町民の情熱、青は雄大な遠州灘と天竜川を表し、黄色は太陽の下で住み良い町づくりを願う気持ちが込められている。

南栄（なんえい）

「南」は自治会名、三本の斜線は馬込川で、瓜内、法枝、田尻の三町の住民が協調してふるさとをつくりたいという願望を象徴したものとなっている。

名残町（なごりちょう）



凧印は名残の「名」の文字をデザイン化したもので、当初「ハイカラ」、「落ち着きがある」と好評であった。

曳馬町本郷（ひくまちょうほんごう）

曳馬町の「曳」に右肩に草書体で本郷の「本」の字をあしらい、雄大さを表した。

東上池川（ひがしかみいけがわ）

ⓐ 重層唐破風入母屋造り
ⓑ 昇り竜、鶴、鐘馗、蓮に鯉

戦前は「池」を小さく「川」を太く大きく朱色とし、上に昇ってもよく目立つようにした。戦後、「池」を大きくし、池川と目立つようにした。

初生町北（はつおいちょうきた）

三方原地域の中で最も早くから浜松まつりに参加した。凧印は、町名の「初」と自治会区分の「北」を表している。

野口町（のぐちちょう）

ⓐ 桃山式重層造り
ⓑ 七福神、唐子童子の獅子群偶像

野口は曳馬野の入口にあたるとされている。凧印は、野口町の頭文字を平仮名で表したものである。

曳馬町三浦（ひくまちょうみうら）

三浦の小字は、現在自治会名にその名を残し、凧印はその名前を伝えるものになっている。

東菅原町（ひがしすがわらちょう）

ⓐ 重層唐破風入母屋造り
ⓑ 菅原道真公、桃太郎と金太郎、十二支

菅原町の氏神様である天満宮に起因している。町民の繁栄と町内の安全を願い、天満宮の紋所である梅鉢にあやかり決定したといわれている。

早馬町（はやうまちょう）

凧印は、大正時代まで「ひょっとこ」であったが、その後現在の「は」の字と矢の図柄に変更した。最初の浜松まつりから参加している。

萩丘（はぎおか）

ⓐ 入母屋軒唐破風重層造り
ⓑ 七福神、雲に飛躍、鶴亀、龍虎、仙人

その昔、三方原台地には萩の花が咲き乱れていたと言われ、このようないわれと、町名の「萩」の字を大紋に図案化したものである。

曳馬町宮（ひくまちょうみや）

「曳」と「宮」の二文字を凧印の基本と考え、一番目立つ字の位置、また大空に揚がった時にも自町の凧が分かりやすいようにとデザインした。

東田町（ひがしたまち）

ⓐ 重層唐破風
ⓑ 昇り竜と下り竜が巻き付いている

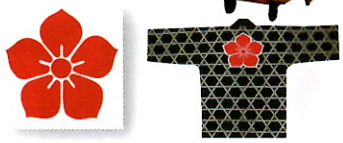
田町、北田町と共に、田町の稲荷神社の氏子であったため、稲荷神社の宝珠と東田町の「東」を組み合わせたものである。

原島町（はらじまちょう）

真ん中に赤い薔薇の花、斜めに緑の2本線で原島と表現している。

旅籠町（はたごまち）

ⓐ 重層唐破風入母屋造り
ⓑ 昇り竜、下り竜、唐草模様、あやめ、牡丹



町名は、当町に旅籠(宿)が多かったことが由来している。凧印には、町の定紋であった桔梗を用いている。

百里園（ひゃくりえん）

地名を表だて、黄色は園をデザインし、大きな輪の中に和をもって一丸となり赤く燃える百のエネルギーによって我里から空高くという願いを図案化。

曳馬町阿弥陀（ひくまちょうあみだ）

阿弥陀という地名は、三方原合戦中に仏像を川に渡して橋として使った徳川家康により名付けられた。凧印は、地名の「阿」の文字に曳馬町の「曳」の字を組み合わせている。

半田山（はんだやま）

半田山にある半田団地自治会の「半田」を図案化した。

八幡町（はちまんちょう）

ⓐ 桃山式二層入破風造り
ⓑ 八幡宮の楠と鳩のとび立った所、葡萄に栗鼠

明治時代から八幡町の凧印は提灯にある親子の鳩でハの字を表し、鳩八と言われていた。昭和初期、太陽に向かって羽ばたく凧印となった。

広沢町（ひろさわちょう）

ⓐ 重層千鳥破風
ⓑ 風神、唐獅子と牡丹おしどり（母子と夫婦）

広沢という名は、曹洞宗の僧、華蔵儀曇が建てた寺を、広沢山普済寺としたことに起源があると思われる。凧印は、広沢町の「ひ」を使用している。

曳馬町金屋（ひくまちょうかなや）

図柄の丸に五瓜に唐花は、当町内の氏神様八坂神社の紋であり、これに「曳」の字をあしらったものである。

東伊場（ひがしいば）

ⓐ 重層唐破風入母屋造り
ⓑ たるの木の先端に850の「い組」の紋を打ち出している

町火消し「いろは」の一番目の文字で非常に活気あふれているということで、「い」が受け入れられた。

初生町（はつおいちょう）

町名の初生町の「初」を採用している。「初」からイメージされる言葉は初子、初凧と、浜松まつりの起源そのものである。

凧揚げ会場では、凧が落下する場合があります。上空にはご注意ください。

三島町（みしまちょう）

ⓐ 軒搦二重屋根唐破風入母屋造り
ⓑ 大山祇神、木花咲耶姫、瓊瓊杵尊、昇竜等

三島町の氏神である浜松神社の祭典時に着用する法被より「三」を引用し、凧印としている。

丸塚町（まるづかちょう）

凧印は町名が一目で分かるようなものがよいと思われ、丸塚町の頭文字の「丸」とした。この「丸」という字は、円満の象徴であり親しみやすく空高く揚がってもよく見える。

本郷町（ほんごうちょう）

ⓐ 加藤清正の虎退治

町民に凧印を一般募集した結果、本郷町の「本」の字を使った図柄が採用された。

船越町（ふなこしちょう）

ⓐ 唐破風軒搦入母屋造り

馬込川の中流にあり、渡し船の仕事をしてきた人たちが居住していた。その由来にちなんで船越町といわれ、凧印も「船」を取り入れた。

宮竹町（みやたけちょう）

蒲神明宮の屯倉（みやけ）があり、いたる所に竹林があったため宮竹と称する説がある。凧印は頭文字の「宮」を中心に、「竹」をバックデザインとした。

三方原町（みかたはらちょう）

合戦の地として名高い三方原町からの初参加として、町民の子供から大人まで判りやすく、天に映える「み」の字を凧印とした。

本郷町東（ほんごうちょうひがし）

凧が空高く揚がった時、はっきり見えるように、町名の読みから「ほ」を取り、凧印とした。平仮名の「ほ」は「保」の草書体であり、初子や町民を町内あげて養い守りたいという願いが込められている。

文丘町（ふみおかちょう）

ⓐ 唐破風
ⓑ 天女、ぼたん

文化施設が多いことから、住民の投票で文丘（ふみおか）と名付けられた。この町名の「ふ」を取って、法被や凧の印に用いている。

向宿町（むこうじゅくちょう）

ⓐ 桃山式大唐破風
ⓑ 飛竜、竜、恵比須腰彫荒波に千鳥24羽

地名の由来は、向州と呼ばれていたためとか、川を挟んで浜松宿と向かい合っているためなどと言われている。凧印は向宿の「む」の字。

三方原町百園（みかたはらちょうももぞの）

町民に一般募集したデザインの中から自治会名の「百園」（ももぞの）を牡丹文字で表したものを凧印として採用した。

馬込町（まごめちょう）

大正4年、天皇陛下ご即位と戦勝を記念して、参加者が全員奴姿に変装した行列が、行きも帰りも沿道の観客に大変な人気を拍したことで、大正5年から現在の奴の絵を使用している。

芳川町大橋（ほうがわちょうおおばし）

ⓑ 仙人と弟子、十二支の動物

この町の由来は、この地の中央に芳川という川が流れていたからである。町名の頭文字である「芳」を凧印とした。

元魚町（もとうおちょう）

ⓐ 唐破風入母屋造り

もともと魚屋が多く住んでいた町であったからといわれている。凧印は、大正の頃は、火消しの纏の中に「も」を入れた図を使用していたが、現在のデザインに変更した。

三方原南（みかたはらみなみ）

ⓐ 重層大唐破風入母屋造り
ⓑ 三方原合戦の両英傑

町名の三方原の「ミ」と、南の「ミ」を組み合わせたデザインの「ミ、ミ」を凧印とした。誰にも分かりやすく、組み合わせにより住民の結束の一助になればという気持ちがこもっている。

松江町（まつえちょう）

凧印は、「本馬込町」時代からの氏神白山神社の社紋「右三ツ巴」。区画整理に伴う最少世帯数7という苦境を乗りきった誇りをもってまつりに臨む。

芳川町神出（ほうがわちょうじんで）

神出組は高町組の指導を受け育った。そこで「おかめ組」にあやかり、ひょっとこ（火男）に決められた。

元城町（もとしろちょう）

ⓐ 城型入母屋造り
ⓑ 浜松城をモデルにした波と浜千鳥

昔、元城町は浜松城の一部にあり、江戸幕府崩壊後、凧発祥の由来が風化するのを惜しみ、日の丸の鉢巻、袖印に身を包み日の丸の大凧を元城の合印にするようになったといわれている。

三組町（みくみちょう）

三組町の中心にある秋葉神社が凧印の元である。秋葉神社は天狗の山として有名であり、その天狗の団扇もみじの葉が、神社旗の印になっており、神社のお許しをいただき、もみじを凧印とした。

松城町（まつしろちょう）

ⓐ 総ヒノキ白木大唐破風重層造り

松城町はこれまで多くの凧印が使われており、十数種類もの図案の記録が残っている。現在の凧印に定まったのは戦後の再開頃からで、遠くに揚がっていても判別しやすいように工夫されている。

細島町（ほそじまちょう）

凧印は、細島町で「細」という字をとったもので、これは町内から凧印の募集を行い、決定したものである。

凧揚げ会場内芝生エリアは、浜松まつり参加者（正規の法被着用者）しか入ることはできません。

和合町西和（わごうちょうせいわ）

御所車の輪は「和」を、外輪を支えるスポークは「合」を表す。「西」の字を組み合わせ「西和の輪を皆で支え合い前進して行こう」という意味を込めた。

連尺町（れんじゃくちょう）

五社神社の紋は藤である。この神社のお膝元であり、氏子が大勢いた連尺町は、「連」の字と「藤」の絵を凧印にした。

山手町（やまてちょう）

ⓐ 重層入母屋軒大唐破風造り

住民投票で決定した町名のPRも兼ねて、町名の「山手」とし、団結を表す意味で「手」の字を赤色とした。

元浜町（もとはまちょう）

ⓐ 桃山式重層破風造り

浜松市の市章を模し「元」を入れたが、市章と間違えられるとの懸念からデザインを変更し、右肩に大きく「元」を入れ、現在のマークとなった。

和田町（わだちょう）

ⓐ 重層入母屋軒唐破風造り
ⓑ 五仙人、黄石公、張良

和田町の「わ」の図柄4点を町民に回覧し、その中から選ばれた凧印を使っている。

若林町（わかばやしちょう）

平成3年5月浜松市合併を機に、平成9年より凧揚げに参加。凧印は若林町の頭文字をとって、「若」とした。

楊子町（ようずちょう）

デザイン上形が整っていること、凧が高く揚がった時にも識別しやすい単純なデザインであること、ということから「よ」が選ばれた。

森田町（もりたちょう）

昔は「森田」を凧印としたが、凧が揚がると「森」が見にくいため、それ以降、片仮名の「モ」と、斜めに「リ」を入れた凧印にした。

渡瀬町（わたせちょう）

ⓐ 一層唐破風
ⓑ 竜、松、雁

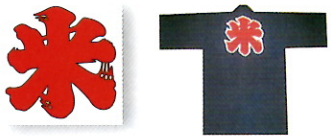
渡瀬町の頭文字の「渡」一文字をデザインした凧印である。

若林町北（わかばやしちょうきた）

真中の赤丸は若林の発展を願う太陽を表し、北はいつも若林を支えていくという思いを込めている。

米津町（よねづちょう）

ⓐ 舟形二層唐破風
ⓑ 松抜き五郎、昇り竜と下り竜、七福神



米津町の「米」をデザイン化した凧印で、古くから地元の法被に使われていた。

薬師町（やくしちょう）

薬師如来を安置する薬師堂があったころから、現在の町名となっている。旧来より秋祭りに使っている、的に矢が刺さった図柄を凧絵にした。

和地山（わじやま）

ⓐ 入母屋造り軒唐破風
ⓑ 不老長寿を約束する仙人達である八仙

この地名は、和地村の入会地、山であったことから「和地の山」と言われたことに起因する。凧印は、町名の頭文字「和」を使っている。

和合町（わごうちょう）

ⓐ 唐破風入母屋造り
ⓑ 桃太郎物語を一連に配し正面に力神をおく

浜松まつりは5月実施、こどもの日は5月5日、桜は花弁が5枚。これと町名の和合を輪五（わごう）ともじって、五輪とし5の数を基本としている。輪の重なりは、町民全体がお互いに手を組み合い、住みよい町づくりが出来ますようにと願いが込められている。

龍禅寺町（りゅうぜんじちょう）

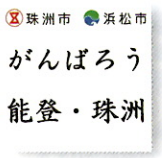
ⓐ 重層唐破風
ⓑ 飛竜、大黒えびす、川中島合戦

昭和28年頃までは「龍」の字は白抜きであった。28年以降、「龍」の字を赤一色に定め、現在に至っている。

安松町（やすまつちょう）

安松町の凧印の「や」は、町名の頭文字をデザインしたもの。

浜松市



2024年3月より開催されている「浜名湖花博2024」をPRするロゴマークは四季折々、様々な色の花木が会場に咲き誇る様子を表しており、能登半島復興支援凧のロゴマークは、能登半島地震被災地への応援の意を込めた被災地支援を表している。

領家町（りょうけちょう）

ⓐ 唐破風二層式

組名も領組であることから「領」の字を使用しようとしたが、空高く揚げた時文字がわかりにくくなるということで「り」の字になった。

山下町（やましたちょう）

ⓐ 重層唐破風軒搦入母屋造り
ⓑ 七福神、鹿、滝昇り鯉、腰彫十二支

山下町の「山」の字を丸くデザイン。凧が正常な向き（上向き）の時は山、逆向きの時は下と読める。一つの凧の字で山下となっている。

防潮堤斜面は立入禁止です。 感染症対策にご協力ください。